

べきものと思ふ。私は交通審議會の將來が遂にこの交通省の設立に歸着するに至らんことを希望する者である。日本の交通問題はこゝに至つて燦然たる一新生面を開き得ることになるであらう。

(九月十三日)

デュギーの主權否認論とバイオクラシー

長谷川久一

スコット氏のテクノクラシーに代つて、新説バイオクラシーを提唱し始めたハーバート大學教授キヤノン博士は吾人の社會に於いて、運河、河川、道路、鐵道、汽船、トラック其他は血液と淋巴液とが絶えず人體を循環するが如く、必須不可分の動的要素であると言つて居る。全く現在の國々に於いては、通信及び運輸は一刻も缺くべからざる重要なセルヴィスとなつてゐるのである。しかも斯かるセルヴィスは國內的にも又國際的にも、現今の國家に課せられたる國內法的及び國際法的義務となるに至つた。凡そ斯くの如き見地に立つてデュギー博士の如きは國家の主權を否認し、國家は主權の主體として見るよりも、むしろ國內法的國際法的にセルヴィスの義務を負へる主體と見做すが、總當なりとの説を唱導してゐる。氏の見解に従へば、國家を構成する第一の要素は人類の集團たる國民

である。此の國民は單に國家の構成要素としての存在があるだけで、此の國民自身が意志を有し、人格を有すとは認め難い。一般に政治的團體を形造れる近世の國民は、都市が家族の集積なるが如くに幾多の都市が集積せられたものである。都市の實體をなす國民は、唯事實上の社會的實境に過ぎずして、人格的實體たるものではない。氏又曰く、國家の第二の要素は、治者と被治者との分化である。一の社會的な國體に於いて他人よりも、より大なる力を有し、事實上此の力に依つて他人に自己の意思を課し得る場合に、治者と被治者との區別を生じて來る。此の力は原始的な社會に於いては、實際上の力若しくは或る宗教的信念に基く一種無形の力であつたが、複雑な近世の社會に於いては、此等の力も亦多岐多様なものとなつた。一國の政府なるものは社會的に生ずる此等種々の力をシステマタイズしたものに外ならぬ。此の強き力は時に強制力たる事ありとするも、それは主權に非ずして單に行爲し得る能力である。即ち統治をなす力は權利に非ずして單なる行爲をなす力である。若し政府から權利を奪つたならば、後には義務のみが残存する事になるであらう。而して此の治者の意思及び強制力は、二重の制限をうけてゐる。其の制限の一つは自己の目的による制限であつて、其の目的とは公役(Public Service)の組織及び統制である。他の制限は事實上、文明社會を一定の領土上に建設する事によつて課せらるる領土的な制限であると。斯くして氏の説によれば、國家の構成要素は、國民、公役、領土の三つとなつて、従來の學說に於いて主權なる概念を置いた所に公役の概念を以て之に代へたのである。而して公役の基本的概念は或る活動の不斷なる履行を保障するが爲に統

治者に課せられたる一つの法律上の義務であつて、其の活動は其の時代の道徳傾向(デンデンツ)方向
リヒツング)及び希望を與ふるものなるが故に、社會生活にとつて極めて重要なものであつて、此の活
動が實現せらるゝ事を希望しないものは社會の一員ではないと言ふ事に歸著する。此の學説は鐵
道敷設法の重要性(ベドイツング)を能く説明して餘蘊なきものであつて、此の理解を押し進めてゆけ
ば、政府が既に制定したる鐵道敷設法を變改するが如き事がある場合には、政府はその代償として、自
動車道路を建設し、鐵道と全然同一の運賃を以て、省營バス及びトラツクにより運輸を營まねばなら
ぬ結果となるであらう。デュギー氏の説により公役なるものは、吾々が社會生活をなすに當つて、事
實上寸時も中斷し得ざる程社會生活遂行上に必要な活動であり、其の公役なりや否やの認定は、飽く
まで社會の實情により決定すべきものであると言ふ理論が闡明せられ、茲に又加へてキヤノン氏に
よりバイオクラシーと言ふ生物學的根據に基く新理論を得たるは、吾人の最も欣快おく能はざる所
であり、其の概要を茲に紹介せんとする次第である。(八九十二)